大川周明、ポール・リシャール、ミラ・リシャール
——ある邂逅

吉永進一[1]

要旨：大川周明は超国家主義者として知られているが、その一方で宗教研究者、あるいは宗教者という側面もある。本論文は、大川の宗教性の全体像を理解するために、彼の宗教性を「知識人宗教」という類型で考察することで、その特徴を抽出し、他方では彼と思想的交流のあったリシャール夫妻の伝記的、思想的なプロフィールを描く。

キーワード：大川周明、ポール・リシャール、オーロビンド、ミラ、知識人宗教

はじめに

近代の宗教者の思想を考える場合、その所属する宗派や宗教だけではなく、宗派や宗教の差異を超えた同時代からの影響も考察する必要があるのではなかろうか。たとえば既に拙稿[1]で論じたように、鈴木大拙における神智学やスウェーデンボルグとの関係がある。近代世界では、大拙を典型例として、東洋と西洋という自他の対立が強く意識される一方で、その裏側では神智学などの霊的思想を介して、東西間での宗教思想の貸借が存在していたように思われる。

大拙と同様に、東西の宗教思想の対立と融和の十字路に立っていた人物として大川周明がいる。大川は超国家主義者として括られており、超国家主義者には井上日召や北一輝といった宗教的な人物も少なくない。しかし大川の宗教性は、他の超国家主義者たちとはかなり異なったものである。北や井上が熱気を帯びた信仰者でもあったのに対して、大川周明の場合、冷静な宗教研究者の部分と実践的な求道者の部分とが混在している。たとえば宗教研究に関しては一般的な宗教学、インド宗教研究、ライフワークとなったイスラム研究へとつながり、求道的な面では道会での活動、西郷隆盛や八代六郎などの人格信仰、そして宗教的次元にまで高められた母への思慕がある。人智学者ルドルフ・シュタイナーの三重社会論の影響[2]や、さらには最晩年におけるカタカムナ農法への傾斜[3]といった事柄も、その宗教性の全体を理解するためには考えなければならないであろう。つまり、いわゆる宗教からははずれているが、しかし宗教的なもの——これが大川の思想においては顕著である。

こうした問題を考究するに当たっては、一方では既成の宗教の枠組みを越えた近代知識人の宗教思想の範囲を措定するという作業が必要であり、他方では大川周明という思想家から、そのような宗教性にあたるものを抽出してみるという作業を要する。このように考えてみれば、大川の宗教性の検討は一筋縄でいくものではない。そこで本稿ではその予備的な作業として、大川とインドと西洋を結ぶ鍵となる人物、リシャール夫妻に焦点を当てて、その伝記的、思想的なプロフィールを紹介したい。その前に、私たちは大川の宗教性について概観しておかなければならない。

１大川周明の宗教性[4]

大川周明は１８８６年（明治１９年）、山形県に生まれ、熊本の五高を経て東京帝国大学文科大学に入学。大学では姉崎正治や高楠順次郎に学び、１９１１年（明治４４年）、龍樹についての卒論を提出して卒業している。１９１８年（大正７年）南満州鉄道会社に就職し、調査局に勤めるまでは、定職に就かず翻訳などをしながらイスラム研究を続けている。この間、１９１４年（大正３年）にプセット『宗教の本質』を翻訳出版している。このように大川の社会的キャリアの出発点は新進の宗教学者であった。大川が宗教学（特にインド哲学）を学問として選んだ理由は、彼の家庭環境にあったわけではない。自らの宗教生活を語った自伝『安楽の門』（1951、出雲書房）によれば、生家は医家で、家の宗教は曹洞宗であったが、とりたてて宗教的な生活を送っていたわけではないという。彼が宗教に目醒めた契機は、

1 舞鶴工業高等専門学校人文科学部門　講師

中学時代にフランス語を学ぶために通った鶴岡のカトリック教会で、フランス人神父マトンとめぐり会ったことにある。大川にとって宗教は、初めからそこにあるものではなく、自ら進んで選択したものであった。

公刊された大川の中学時代の日記には、彼の宗教への率直な意見が述べられており、たとえば、プロテスタントの牧師の祈りを聞くと「神々しい気分」になるが[5]、カトリック教会の儀式ではそのような気分にならないとして、批判的な意見を述べている。この態度は、経験を宗教現象の本質とするシュライエルマッハへの共感につながり、さらに晩年まで基本的には変わっていない。『安楽の門』において、その本質主義的、経験主義的な立場から、次のようにキリスト教会を批判している。

「一切の外面的要素を取除いた後に、イエス自身の純一平明な福音が残る。そして福音そのものの中にも内面的部分と外面的部分がある。而も外部の覆面に蔽われながら、福音の至醇な内面の光輝は到る処を照らして居る」が、しかし、これを忘れるなら、「知識人の宗教的要求を満足させぬであろう」[6]

中学時代の大川は、キリスト教だけでなく社会主義にも関心を寄せていたようで、明治３６年９月中に閲読した書籍として、キリスト教関係の書籍と並んで、『朝報社有志講演集』、ベラミーの『百年後ノ世界』、西川光二郎『社会党』などの文献が並んでいる[7]。明治３７年には、神田錦輝館での平民社の演説会に出て、西川光二郎、堺利彦、幸徳伝次郎、木下尚江、安部磯雄（明治３７年４月９日）[8]の演説を聴いている。ちなみに、西川光二郎と木下尚江は幸徳事件の前に社会主義を離脱し、西川は一時期、大川と同じく道会に所属して、その後は修養家として名を成し、木下は岡田式静坐法に熱中するなど、いずれも宗教といえないが宗教的な運動へと向かっている。その点では、最後まで既成宗教に属さなかった大川も同様であった。

さらに興味深い事項は、明治３７年２月１１日の項である。この日、大川は桑原俊郎の『精神霊動催眠術』を読みふけり、次のように述べている。

「余は本日遂に催眠術なるものを信ぜり。同時に所謂奇蹟。神力なる物をも之を確信せり。これ実に催眠術を以て解釈すべきものなり」[9]

桑原は単なる催眠術師ではなく、精神力によって治病を行い、さらには透視のような超常的現象までも自由にできると広言していた。修験や真言密教のような過剰な儀礼を要せずとも、あるいは死者霊や神々のような神霊的存在を前提としなくとも、個々人の精神は宇宙の大霊と一体化することで精神力を発揮し、宗教的奇蹟を起こしうると桑原は述べている。いわば前近代的な呪術的宗教の心理学化ともいえるが、そのような理論化が世俗化や合理主義的な還元につながるのではなく、新たな聖化、新しい「魔術」の発生につながっている点が彼を他の催眠術師から際立たせている点である。さらに桑原は、宇宙全体が神であり如来であり天帝であり、宗教と名称は異なれどもその究極的実体は同一であるとし、「わけのぼる麓の道は異なれど、同じ高根の月を見るかな」という古歌を引いて万教帰一論を主張している[10]。桑原の宗教論がどこまで大川に影響を及ぼしたかは不明ではあるが、後の道会とも共通する宗教性がその著書には見られるのは興味深い。

さて大川は１９１１年（明治４４年）に大学を卒業すると、道会に参加している。道会は明治４０年に松村介石の創始した新宗教団体であるが、この団体は普通の意味の「宗教」とはいささか異なる。松村は明治２０年代はキリスト教説教師として名を馳せたが、聖書の高等批評を知って、キリスト教に批判的になり、一時、宗教界を離れていた。その彼が明治４０年に教界に復帰して始めた運動が日本教会（後に道会に改名）である。発足当初は平井金三や村井知至のようなユニテリアンや、日本的キリスト教を唱えた押川方義など、それぞれ一家言ある宗教家が集まっていたが、基本的な教義は陽明学とキリスト教という東洋と西洋の宗教思想を結びつけたものであった。その一方で松村は心霊研究に興味を持ち、平井と共に心象会という別組織を開いて心霊実験を行い、あるいは藤田霊斎の心霊治療や呼吸法を世間に広めている。

大川が道会に入会したのは、初期のイデオローグであった平井金三の去った後になる。入会と同時に次世代のリーダーとして期待されていたようで、１９１２年（明治４５年）７月から１９回に渡って、不朽青年会（道会の内部組織）で宗教講話を行い、また松村介石の洋行中には『道』の編集を任されている。さらに１９１５年（大正４年）５月、道会に中央青年会が発足した時は、幹事に就任している。ただし、松村介石本人からは大川は影響を受けなかったと『安楽の門』では述べている。大川は道会の活動の中で出会い、影響を受けた人物に、日本的キリスト教を唱えた押川方義、そしてユニテリアンであり、社会主義の紹介者でもあった東京外大の村井知至、あるいは軍人の八代六郎を挙げている。

大川は、敬愛していた八代六郎に寄せて、次のように述べている。

「八代将軍と同じく私にも仏教や基督教には何分『馬鹿らしき事』が多く思われた。そして其の『馬鹿らしき事』が信仰の礎だと教えられては尚更納得出来なかった。」[11]

「私には八代大将に対する小笠原中将［小笠原長生のこと。八代に法華経信仰を教えた］のような導

師はなかったが、書物を読んで勉強し、心から尊敬する先輩に親炙して直接その宗教的一面に触れ、且つ自分自身の経験を深く反省して行くうちに、いつとはなく既成宗教の信者になりたいという意識がなくなった。」[12]

既成宗教に属すことなく、読書と反省の内に自らの宗教を深めるという態度は、深澤英隆のいう「知識人宗教」の類型にあてはまる[13]。深澤は１９世紀末から２０世紀前半のドイツをモデルに、教会人ではなく知識人による知識人のための宗教に対してこの語を用いたが、その直接の祖先は１８世紀のプロテスタント神学者シュライエルマッハーの宗教観に求められるという。儀礼の軽視、宗教経験の重視、経験の直接性など、深澤の挙げている特徴は、おおむね大川の宗教論に当てはまる。もちろん大川自身がシュライエルマッハーと高楠の師匠であったマックス・ミューラーという二人のロマン主義者によって自己の宗教観を形成しているからであるが、しかし大川以前の知識人宗教家たち（村井知至、平井金三、八代六郎、おそらくそこに静岡師範学校の教員であった桑原俊郎を加えてもいいだろう）の存在を考えれば、「知識人宗教」は、既成宗教の疲弊が意識されてきた近代という時代において、かなり広い範囲で出現してきた宗教形態かと思われる。

日本における知識人宗教という類型には、たとえば岡田式静坐法が考えられよう。岡田虎二郎のもとには大学の教員や高等学校の学生などの知識人が集まっており、岡田の講話には、エマソンの内的霊性論から近世養生論の丹田呼吸法までの東西の心身思想や霊的思想の断片が引用されている[14]。そこには禅仏教やキリスト教の影響はもちろん顕著であるが（ただし同時代の仏教僧に対する批判も厳しい）、エマソン、スウェーデンボルグなどの影響も大きい。

これは西洋の場合も同様であり、教会の宗教に不満を抱いた西洋知識人が代替的な宗教を構築するとすれば、神秘主義、スピリチュアリズム、オカルティズムなどのキリスト教会外の霊的思想と、仏教などの東洋思想（あるいはその代用として神智学）を用いることが多かった。とりわけ神智学運動それ自体が、一種の知識人宗教であり、西洋の場合、個人的な知識人宗教を追求する求道者たちが神智学を（理念的にも実際にも）通過することは多かった。大川周明に大きな影響を与えたフランス人思想家ポール・リシャールも、神智学徒周辺にいた知識人宗教の求道者の一人に含めることができよう。

２　ポールとミラ・リシャール[15]

ポール・リシャール（Paul Richard）（1874-1967）はフランスの詩人、哲人と紹介されるが、その妻ミラとちがって詳しい伝記は存在しない。１８７４年、南仏に生まれる。父はユグノー派の牧師であった。リセでは乗馬に熱中し、陸軍に入り４年間騎兵として北アフリカに駐屯。除隊後は哲学と神学を学び、１８９８年から１９０５年まではプロテスタント牧師を勤める。１９００年にオランダ人女性と結婚、５人の子供をもうけている。彼はリセ時代にクロポトキンを読み（ここで想起すべきは、中学時代の大川周明が平民新聞を読みふけっていたことであろう）、牧師になっても貧民救済運動を行った。しかし教会の中では行き詰まり、牧師から転じて法学を学ぶ。またその一方でフリーメーソンに入るが（当時、フランスのメーソンは反カトリックで人権派であった）、これも最終的には離れている。１９０８年７月法律の学位を取得し法曹界に入る。

他方、彼は秘教思想や神秘主義への関心を深めている。メーソンへの加入も、隠れた知識への関心からであったが、失望して終わっている。当時のパリの心霊サークルに出入りしている内に、マックス・テオン（後述）の元で修行することになり、そこでミラと出会う。ポールは結局、ミラと共にテオンのサークルからも離れて、二人で生活し始める。また、ミラから思想的な刺激を受け、秘教的な著作を執筆し始めている。

１９１０年リシャールは、選挙に出馬するためにインドにあるフランス領の都市ポンディシェリを初めて訪問する。ポールは「賢者」を探して回り、隠遁状態のオーロビンドを訪問、面会に成功している（オーロビンドも同１９１０年４月に同地に到着して間もなかった）。また、インドを離れる前にアディヤールに赴き、神智学本部を訪ね、アニー・ベサントとクリシュナムルティに出会っている。この後、選挙出馬の予定が変更になったポールは、一旦フランスへ帰国し、翌１９１１年ミラと結婚している。その後、ポールはバハイ教のアブドゥル・バハと親しくなる。あるいはマダム・シモンというユダヤ人女性を中心としたサークルとかかわり、諸宗教における神観念の一致について研究している（この研究は、その後、ゴーシュによって英訳されたという）[16]。

一方、妻のミラは、現在ではむしろ夫よりも有名であろう。彼女は後半生をオーロビンドのアシュラムですごし、「マザー」と呼ばれて、アシュラムの精神的、実際的な指導者となったからである。またその経歴は近代オカルティズムの歴史や植民地主義を考える上でたいへん興味深いものである。

ミラ・アルファッサ（Mirra Alfassa）（1878-1973）は、１８７８年パリでトルコ人の父とエジプト人の母の間に生まれる。父モーリスは、１８４３年にトルコのエディルネ（ブルガリアとの国境近くの町）に生まれる。ユダヤ人の家系と言われ、職業は銀行家であった。父はトルコのアドリアノープル生まれ、

母はエジプトのアレクサンドリア生まれで、母も銀行家の家系でユダヤ系の血が入っていたという。夫妻は最初はトルコ、次にエジプトで暮らしたが、母方の祖母ミラ・ピントを頼ってパリに出てくる。祖母のミラは解放された女性の第一世代で、エジプト女性ながらパリに在住し社交界の有名人となり、他方、ハーレムの姫君にヨーロッパの文物を販売していた。その娘であるミラの母親も、強靭な意志と合理主義的知性の持ち主だったようである。父親のオットマン銀行が破産して全財産を失い、ミラも多少の苦労を経験しているが、世紀末パリのブルジョワ家庭という恵まれた環境に育った。最初、彼女は画家の道を選び美術学校に学び、画家のアンリ・モリセと結婚している。そして１９０３年、マックス・テオン（Max Theon）の主宰していた雑誌『宇宙雑誌』(Revue cosmique）と、その「宇宙的運動」を知り、そこから彼女のオカルト遍歴が始まる。

このテオンという人物については、研究書『ラクソーのヘルメス同胞団』[17] 中で、ある程度の情報は得られるが、かなり謎めいた人物である。生地についてはシリアかレバノン当たりの東地中海地域、もしくはミラの意見ではポーランドかロシアといわれる。生年も１８４８年前後に複数の説があり、結婚証明書には Louis Maximillian Bimstein という名前が残るが、これが本名なのか、複数ある名前の一つなのかは分からない。ある説では、ユダヤ人でポーランドを出る前にハシディズムのイニシエーションを受けていたともいう。ともかく１８８０年代はロンドンにいてサイキック・ヒーラーとして活動していたことは確かであり、１８８５年に女性霊媒ユナ（Una）と結婚している。彼女は本名メアリー・ウェア（Mary Ware）といい、すでにロンドンでは名の知られた霊媒であったが、テオンと結婚した後はアルジェリアに移住、フランス人のオカルティストの間ではアルマ（Alma）という名前で知られるようになる。テオンの唱えた「宇宙哲学」は、インド、ヘブライの秘教とアルマの霊視情報がもとになっている。

なお、テオンは霊媒能力開発の達人であり、何人かの霊能力者を育てているが、その一人がトマス・バーゴイン（Thomas Burgoyne）という人物で、彼はピーター・デイヴィッドソン（Peter Davidson）と組んで「ラクソーのヘルメス同胞団」（Hermetic Brotherhood of Luxor）という結社を開設している。この H.B.L.は、１８８４年当時イギリスでは唯一、実践的オカルティズムを教える団体であった。そのために HBL はある程度の評判を得ていたが、二人がアメリカに移住して中途半端に終わっている（なお、バーゴインの系統はアメリカで Church of Light として現在まで続いている）。近代オカルティズムの潮流は、１９世紀末にかけて、神智学のような知識的な運動から、「黄金の曙教団」のように心身技法を用いる実践的な方向へと方向を転換していくが、H.B.L はその先駆をなす団体であった。

さて、テオンの方であるが、フランスで１年半滞在後アルジェリアへ渡り、トレムセン（Tlemcen）郊外にある山荘に落ち着く。同所で十数年の隠遁生活を送った後、オカルティスト F.Ch. バルレ（F-Ch.Barlet）がテオンの教説「宇宙的伝統」(Cosmic Tradition）を「再発見」する。１９０１年にバルレはテオンを説き伏せて、『宇宙雑誌』を創刊。編集長はバルレで、会長はアイア・アズィズ（Aia Aziz）（テオンの別名）で発足したが、ただしバルレはテオンがカバラに傾くのを嫌って間もなく会を辞めている。ミラは１９０５年パリでテオンに会い、翌年と翌々年、いずれも７月から１０月にかけて、アルジェリアの彼の山荘に滞在している。ここの果樹園は、ミラの回想を信じるならば、フィンドホーンやポイントロマにも比べるべき農業の奇跡ともいうべき場所で、サハラ砂漠の近くでありながらさまざまな果樹が実ったという。アルマは一見覚醒状態ながら、ほとんどいつもトランス状態に入っていて、念じるだけでテーブルを動かすといった能力を発揮した。ミラもテオンのもとで超物質的世界に入る術を身につけ、一度は幽体離脱状態でテオンの命令で「生命のマントラ」を発見したが、テオンの命令に逆らってそれを読まなかったところ、テオンに幽体と肉体をつなぐ銀の線を切られたという。ともかく、北一輝と妻の関係と同じく、テオンにとって妻のアルマが貴重な霊界情報を得るチャンネルになっていたのは間違いなく、「宇宙哲学」の運動は、１９０８年にアルマが死去すると自然に停止状態になっている。テオンの没年は１９２７年である。

ミラは、その後、テオンの運動とも疎遠となり、１９０８年には最初の夫アンリ・モリセと離婚し、先述したように１９１１年にポール・リシャールと結婚し、１９１４年、再度ポールにインド行きの用事ができて、ポールとミラは共にポンディシェリを訪問している。

オーロビンド・ゴーシュ（Aurobindo Ghose）(1872-1950）は１８７２年カルカッタ生まれ。彼はイギリスで教育を受けた西洋的教養人であった[18]。イギリスから帰国後、英語とフランス語の教師となる一方で独立運動に参加。１９０６年ベンガル国民学校の校長となり、ベンガル国民党のリーダーとして活躍する。彼がヨガを「発見」したのは１９０４年のことであり、１９０６年にヴィシュヌ・バサカ・レレ（Vishnu Bhasakr Lele）に弟子入りする。同年、政治運動のために投獄されるが、獄中でもバガバッド・ギータ、ウパニシャッドを学びヨガを実践して

いた。出獄後も政治運動を続けていたが、霊的な指示によって１９１０年フランス領インドのポンディシェリに移っている。１９１４年は彼の周りにアシュラムが形成されはじめていた頃であり、ポールはオーロビンドの機関誌 Arya の発行を援助するなど、萌芽期の教団形成に協力している。しかし、独立運動家とフランスの政治家が出会うことにイギリス政府当局は神経をとがらせ、翌年２月リシャールはイギリスからの圧力で、ポンディシェリを離れ帰国せざるをえなくなる。

１９１６年、フランス製品の中国、日本への輸出振興の仕事を得て、リシャール夫妻は再度極東へ行くことになる。当時、大戦中の船旅は危険だったので、志願者は少なかったという。１９１６年（大正５年）５月、リシャール夫妻は日本の横浜に到着している。到着して間もないリシャール夫妻に、劇作家の秋田雨雀は出会っている。同年５月３１日の項には次のようにある。

「午後入浴後、床につくと、エロシェンコ君と里見君がきた。フランス人でリシャール（東洋哲学者）という人がアレキサンダー女史のところへきているというので、晩にぼくもゆく約束をする。今夜リシャールが宮崎氏とあう約束であったが、こなかった。リシャールは妻君と仏語のできる若い女といた。主人はテオソフィの人で、インドを経てきた人で、スウェデンボルグや、アンナ・ベーゼントのことを話した。ぼくに日本の医薬（秘密薬法）のことを聞いた。オゾンの薬のことを話していた」[19]

エロシェンコは当時、中村屋に援助を受けていた全盲のロシア人詩人、宮崎は預言者、宮崎虎之助、アレキサンダー女史とは、アメリカ人バハイ教徒のアグネス・アレクサンダーである。雨雀は当時、彼女に協力してバハイ教の布教に尽力していただけでなく、スウェーデンボルグにも興味を持っていた[20]。スウェーデンボルグ、神智学、バハイ教と、雨雀とリシャールの関心は重なりあい、リシャール夫妻との交流は一年ほど続いている[21]。

ポール・リシャールは、日本に来て、雨雀だけでなく詩人のタゴール[22]やジェイムズ・カズンズ[23]とも交際を結んでいたが、最も親しく行き来していた人物は大川周明であったろう。

３　日本でのポール・リシャール

大川が政治に目覚め、アジア主義を唱える機縁となったのは、１９１３年（明治４５年）、ヘンリー・コットンの *New India* を読み、インドの悲惨な現況を知ってからだといわれる。

さらに大正４年、大川は偶然、インド独立運動家のラス・ビハリ・ボースとヘームラバ・L・グプタと知り合っている。両名はイギリスの圧力によって両名が国外退去させられようとして、頭山満の援助で新宿中村屋に匿われるが、グプタは翌年大川のもとに身を寄せ、最終的にはアメリカへ出国している。こうして大川の周囲には、インド独立運動との人脈が広がっていたが、リシャール夫妻との出会いもその一環であった。

１９１６年（大正５年）１０月、大川はハラ・プラサドの講話の席上、リシャール夫妻に出会っている。その時のことを１９５７年に回想して、次のように書いている。

「私の深いところを揺り動かす、若い女性［がいた］。彼女の何かに私は引きつけられた。（中略）彼女とその友人たちは新しいアジア、新しい世界を夢見ていた（中略）私たちは一年間共に暮らした。毎夜、一時間、瞑想していたが、私は禅をやり、彼らはヨガをやっていた」[24]

ヨーロッパ文明が終焉しつつあり、アジアから新しい文明が興りつつあると唱える西欧人リシャールの存在は、大川だけでなくアジア主義者たちにとって貴重な存在であった。しかし、それだけでなく、リシャールの宗教性も、大川の宗教性に通じるものであった。

他方、ポールにとっても大川は自己の思想を補足してくれる存在であったようで、１９６１年になって、大川との出会いを回想して次のように書いている。

「当時余の訪日予定は、単に中国への途上に於て立寄ろうとするだけのものに過ぎなかった。併し、余は日本到着数日の後、東京に於て大川周明に遭つた。その結果、中国へ行くかはりに四ヶ年を日本に滞留することになってしまった。（中略）東と西とは補足するものとして対立する。この故にこそ両者は一にならなければならぬ。大川周明と余自身も亦補足的に対立するものであった」[25]

リシャール夫妻は、最初は東京の茗荷谷に居住し、１９１９年（大正８年）から１９２０年（大正９年）２月に神戸より出発するまでの１年間は、千駄ヶ谷の屋敷で大川と同居していた。この間、ポールは大川の紹介で頭山満、北一輝、内田良平、川島浪速（その養女、川島芳子）、葛生能久といった右翼の有名人と親交を結び、『道』誌への寄稿や講演を行っている。

大川とリシャール夫妻の日常的な関係は、『第十一時』の序文によれば、次のようなものであった。

「予が初めて氏を訪へるは、小石川茗荷谷に仮寓せる時であった。毎週三度、竹早町で電車を下り、切支丹坂を降り幽霊坂を上って、予は氏の寓を訪ふた。訪ふのは毎に午後四時前後、先づミラ夫人に仏語を教はった後、氏一家と晩餐を共にし、夜更くるまで談論して帰るを常とした。大正八年二月、氏が

千駄ヶ谷に移ってからは、竟に予も亦同居することとなり、全く生活を一つにした。

さり乍ら吾等は常に談笑して居たのではない。吾等の対話は多くの場合、如字的に議論であった。吾等は根底に於て同一原理を把握して居るに拘らず、具体的事象の批判に於て常に其の高調する方面を異にした。(中略) 吾等の議論は広汎なる範囲に亙ったが為に議論の種は尽きなかった。そは真に一個の戦いであった。卓を叩き床を踏んでの議論であった。或夜の如きは、ミラ夫人が泣いて吾等の論争を止めたことさへあつた。」[26]

それでは、大川が議論を戦わせながらも高く評価したリシャールの思想とはどのようなものであったか。彼は以下の３冊の著書を編集、翻訳している。

（１）　ポール・リシャル、大川周明訳『告日本国』（大正６年、山海堂出版部）

（２）　ポール・リシャル、大川周明訳『第十一時』（大正１０年、大鐙閣）

（３）　ポール・リシャル、大川周明訳『永遠の智慧』（大正１３年、警醒社）

次にその内容を簡単に紹介しておきたい。

まず、『告日本国』は、大川の依頼で筆を起こし、日本の使命について書いたもので、日本語訳、ミラによる英訳、松山康国の漢訳をつけて出版された。この邦訳部分は、他の政治的記事と共に『第十一時』に再録されている。

『第十一時』は、『告日本国』を含め、「万国の主」「第十一時」「黎明の亜細亜」（日本で行った講演集でオーロビンド・ゴーシュを紹介する「亜細亜の真人」を含む）など、日本で出版した記事を集めたアンソロジーであり、アジアの解放、西洋の植民地主義批判という彼の主張を軸にした政治的な記事が多い。また翻訳には沼波瓊音や栗原古城が協力している[27]。

リシャールは、まず、「告日本国」「万国の主」において、国々の上に超越的な支配者が存在すると述べている。「万国を貫く此の見えざる意志、世界と其の運命とを支配する此の思想」（「告日本国」）[28]、あるいは「万国の主あり。而も見よ、万国その主を知らず。世界の諸政府は、彼等の上に在りて彼等を治むる者あるを知らず」（「万国の主」）[29]ともある。この主は正義を行い、新しい時代、新しい四海同胞の世を始めようとしていると述べている。将来の世界には、現在の国境を越えた超国家が出現し、北方帝国（アジア、ロシア）、南方帝国（ヨーロッパ）、西方帝国（イスラムからアフリカ）、東方帝国（太平洋を支配する太陽の戦士団）、インド、中国、インドと中国の間にできる中央帝国の七つの帝国に分割されるだろうともいう（「万国の主」）[30]。

こうした空想的な政治予想の一方で、西欧列強の植民地帝国については仮借ない批判を浴びせており、第一次大戦の災禍は、植民地での西洋諸国の蛮行に対する正義の審判であるとも述べている。「野蛮とは、国民並に人種が、相互の尊敬を欠き、相互の理解を欠き、無智と高慢とに陥って居る事である」（「亜細亜連盟の提唱」）[31]。むしろ文明国を自称するヨーロッパこそ蛮国であると彼は批判する。

リシャールは、その日本論で、日本は「三千有余年」の独立と皇統に恵まれ、中国、インド、ヨーロッパからの文明を受けて進歩してきた国であると賞賛しているが、それと同時に、享受してきた自由や福祉といった特権を他国へ分け与えることがその責務であるとも述べている。日本の任務は、西洋の植民地主義帝国からアジア諸国を解放し独立させることである。日本は西欧の植民地主義をまねるのではなく、中国に対しても奪還したものを返却すべきである。そして日本と中国が結びつけば、「世界の司法者」「統一の中枢」となる（「告日本国」）[32]。

ところで、そもそも「万国の主」とは、果たして単なる寓話なのだろうか。秘教思想には「見えざる上位者」といった神話的存在がつきものであり、神智学でも、ヒマラヤには賢者にして魔術師であるマハトマが隠棲しており、全世界の神智学運動をその超能力によって指示していると信じられていた。さらにアニー・ベサント率いるアディヤールに本拠を置く神智学協会は、１９１１年に「東方の星結社」を興し、若きクリシュナムルティを「世界の教師」とする、一種のメシアニズム運動を始めたところであった（１９２９年にクリシュナムルティ本人が運動を停止させるまでこれは続いた)。リシャールが秋田雨雀に向かって神智学とベサントについて語ったとすれば、彼がクリシュナムルティ運動を知らなかったことはありえないだろう。おそらく彼の政治思想には当時の秘教思想から借用されたアイデアがあったはずである。

最後に、『永遠の智慧』（英語版題名 *Eternal Wisdom*）は、オーロビンドの機関誌 *Ayra* に連載されたもので、いわば彼の宗教思想のエッセンスともいえる著書である。ただし彼自身の筆によるものではない。一つの文脈に沿って、東西の宗教思想の断簡をテーマごとに集めるという、引用、編集によって成立した書である。引用された書籍や思想家は、聖書、仏典、ゾハール、ヴェーダ、ウパニシャッド、マハーバーラタ、バガバッドギータ、大学などの経典、エックハルト、タウラー、ヤコブ・ベーメらの

ドイツ神秘主義者、ジョルダーノ・ブルーノ、ライプニッツ、スピノザといった近世哲学者、近代ではエマソン、トルストイ、ニーチェ、宗教家ではラマクリシュナ、ヴィヴェカナンダ、バハ・ウラー（バハイ教の教祖）など広い範囲に及ぶ。オカルティズムや神智学文献からの引用はほとんど見られないが、ただヘルメスとあるのは、ヘルメス文書のことと推測される。このような断片は「序品」「万有に超在し又内在する神」「真理の証悟」「真理の躬行」「小我の克服」「神聖者の勝利」「偏一切者に於ける一切の融会」の七章に分けて整理されている。たとえば「内在の神」を説いた一節[33]は次のように構成されている。

一神とは何ぞ、曰く天地の心なり、二此心即ち一切世間の法と出世間の法とを摂す、三神は万物の主なり、父なり、本原なり、而して生命なり、力なり、光明なり、智慧なり、精神なり、四そは一切処に偏く、万物を抱擁す、五極微の一体と雖も、一部の神性を帯びざるはなし、六蓋し一切は神をもて充満し、七一切は実有をもて充満す

一セネカ、二大乗起信論、三ヘルメス、四バガバッドギータ、五ジョルダーノ・ブルーノ、六ヘルメス、七シュウエータシュワタラ・ウパニシャッド

個人に内在する神性が強調される一方で、制度的な「宗教」については批判的である。「各人の心霊には、神たるべきものを宿せり。吾等の努むる所は、心裡の神性を開発するにあり」（ヴィヴェーカナンダ）（同書、７５頁）、「其心常に永遠者と偕なる者は、儀式を要せず、また礼拝を要せず」（ラーマクリシュナ）（同書、７８頁）、「人其頭を剃るが故に宗教家となるに非ず、真理を悟り、正義を行ふて始めて真実の宗教家となる」（法句経）（同書、８１頁）、あるいは「出家にして迷妄に堕するものあり、俗人にして菩薩となる者あり」（出典不詳）（同書、８２頁）という章句がならぶ。

古今東西の宗教、哲学思想を抜き出して編集するという作業は、ブラヴァツキーの著書に見られるように、神智学などの近代秘教主義では定石ともいえる手法である。ただリシャールの場合は、それを極端にまで推し進めたわけである。この引用した部分も、出典の文脈を無視しての強引な切り貼りではあるが、大川の翻訳文の巧みさもあって、ひとつの文章をなして、東西思想に共通する汎神論が抽出されている。その他、この書では梵我一如、内的神性、真理の探求など、インドの近代宗教と西欧の神秘思想の最大公約数的な教義がパッチワークのように綴られている。

リシャールの思考の特徴は、その連続性にあった。彼にとって政治思想と宗教思想とは区別できるものではなく、いずれも徳義にかかわる問題であり、アジアとヨーロッパの宗教は連続して一つをなし、内的神性にかかわるものであり、あるいは、聖職者と俗人とは形式において区別されるべきものではなかった。

ところで、東洋思想と西洋思想の出会いに関しては、リシャールの周辺にもう一人、特記すべき人物がいる。夫妻は一時、京都に滞在していたが、その滞在中、ミラが特に親しく交際していた人物が医師小林参三郎夫人の信子である。小林参三郎は、その著『生命の神秘　生きる力と医術の合致』（大正１１年、春秋社）の序文によれば、１８９１年にクーパー大学を卒業して博士号を取得、９７年にイギリスの聖トマス病院、ロンドン大学病院で研鑽、ハワイ、香港での開業経験があるという。専門は外科、特に婦人科の手術を得意としていた。帰国後、この当時は、東寺が運営していた済世病院の院長を勤めていた。この一方で彼はまた、岡田式静坐法の実践家でもあった。明治４２年頃、自分自身の神経衰弱が治らないことに業を煮やし、岡田式静坐法の中心地であった日暮里の本行寺まで行って岡田虎二郎の門を叩いている。これが効を奏し「いくら働いても疲れはせず、何を食べても旨く、又山を見ても花を観ても皆趣がある」[34]ようになったという。彼は岡田式静坐法の医学的応用を実践した数少ない医師であり、その死後は夫人が静坐社を興し、京都での岡田式静坐法の中心となっている（現在も存続）。ちなみにビハリ・ボースを匿った新宿中村屋の相馬黒光も熱心な静坐法の実践家であり、大川周明の所属した道会は一時期は藤田霊斎の息心調和法の宣伝に努め、あるいは川合信水の実弟で大川とも交流の深い肥田春充の強健法を紹介するなど、健康法を介したネットワークがあった。

注目すべきは、小林の著書『生命の神秘』で、該書中で彼はリードビーターのオーラ図（Ethel M. Mallet, *First Step in Theosophy,* 1920 が出典）と、呼吸法の中興の祖である江戸時代の医師、桜寧室主人平野重誠（革谿）の『養生訣』とを比較し、その連続性を指摘している。

「天保年間に京都に桜寧主人と称し養生訣といふ書を著はした人がありました。医師ですが余程の達人とみえてその書に記するところ実に名論卓説で、私共のいふ臍下丹田を錬ることを薦めています。（中略）又その中に、人間の善悪正邪の思ひが悉く気となりその体より発出するとあります。これは驚く可き記事であり、既に神経衰弱の章に一寸述べていましたが、現今喧しい Theosophy の説と同じいのです。それに依れば、人間の思ひは必ず発光となり身体よ

り出づのるのであり、又その心の異るにつれてその光の色も異るのであります。例へば人が心に聖者を慕ふたり神明仏陀を念ずるかしてその心が敬虔の念ひに住する時は、其人の体からは青色の光が出る」[35]

神智学の知識をいつどこで得たか、小林の著書には記されていないが、リシャール夫妻の交流がそこに何らかの影響を与えた可能性はある。いずれにせよ、「現今喧しい」というほどに、神智学が彼の周辺では話題になっていたわけであり、小林と京都における静坐法運動をめぐるネットワークは、今後、調査する価値はあろう。

４　終わりに――問題の範囲

１９２０年（大正９年）２月、リシャール夫妻は離日してインドへ向かい、ポンディシェリに戻る。１９２１年（大正１０年）６月８日付の大川宛の手紙によれば、１９２０年１１月ミラはオーロビンドの元に残り、ポールはアディヤールに向かう（手紙には書かれていないが、地名からして当然、神智学協会本部を訪問したはずである）。ポールはさらにアディヤールからヒマラヤに近いコトガルという村に移り、そこでしばらく行者のような生活を送っていた。インドを離れると、中近東を旅してフランスへ戻る。１９２９年に講演のために渡米し、その年、リンダ・トッドという女性と結婚したが、間もなく別れている。さらに１９３１年、３０歳年下のリンダ・ストロンバーグと知り合い結婚している。ポールは定職もなく、時折翻訳や語学教師などを勤めていたが、妻の稼ぎで生活していたようである。１９５３年に、二人は分かれるが関係は続いた。１９６３年、８９歳のポールを最後の妻ヴァージニアはブルックリンのアパートに引き取り、ポールは１９６７年に亡くなっている[36]。

一方、ミラは、そのままオーロビンドのもとに残り、インドで一生を終えているが、彼女はオーロビンドの弟子というよりは、霊的に重要なパートナーであった。彼はミラを「マザー」と呼び、宇宙進化のエネルギーである「シャクティ」と同一視している。また自分自身は、高次の意識（Overmind）は経験したが、それより高い超高次の意識（Supermind）を経験したことはない、しかしミラはそれを経験しているとも賞賛している[37]。ミラの Supermind 経験は、マックス・テオンのもとでの霊媒修行と何らかの関係があると思われるが、西洋オカルティズムのオーロビンドの「総合ヨガ」への影響関係については、更なる考究が必要であろう。

ともかく、オーロビンドは、ヨガに入門する以前は西洋流の教養を身につけていた知識人であり、その宗教思想は近代的なものであった。彼がポール・リシャールや大川周明と気脈を通じることになったのも不思議ではない。たとえば彼は諸派に分かれたヨガの総合（synthesis）や統合（integral）という言葉を用いるが、その総合とは、形態や外見を無視して、共通の中心的原理をつかみだすことである[38]。あるいは、彼にとっては、キリスト教やイスラム教などの分化した宗教は限定的な真理であり、宗教の本質とは、存在であり生成である絶対的なものを経験することである。いわゆる宗教、政治、経済といった断片的な知識が問題ではなく、それら全体を包括するような世界観が重要なのであり、その視点にまで進めば、宗教と世俗の区別もなくなるとされる。宗教伝統の中にある絶対的存在ではなく、こうした抽象的な宗教の本質としての絶対を仮構する宗教観は、本稿で扱った宗教的知識人たちに共通のものであった。

リシャール夫妻と大川周明を軸に、その周辺の国際的な人脈ネットワークを探索していけば、このような宗教的知識人の例はさらに集積されていくことだろう。

それらは、チャーチやセクトのように、組織による明確な限界線を持たない。守るべきキャノンや正統もなければ、逆に異端もない。書籍によって、あるいはゆるやかなネットワークによって、国境や宗教間の壁も越えていく。ただし、彼等の背景には古代哲学、神秘主義、スウェーデンボルグ、スピリチュアリズム、神智学といった近代以降の霊的思想と、比較宗教学が混合して、一種の思想交換の貨幣あるいは共通語（リンガ・フランカ）を構成している。もちろんポール・リシャール、村井知至のように、宗教集団に属さない宗教人の場合もあれば、オーロビンドのように、一見伝統的な宗教の流れに身をおいているように見えても、その実は近代的で国際的な影響を受けているような、いわば「偽装」された知識人宗教もある。あるいは大川や岡田虎二郎のように政治や健康法などに、その思想が「偽装」されている場合もある。

冒頭で述べたように、大川の宗教性の全体を抽出するには、一方では近代知識人の宗教思想の範囲を測量し、他方では歴史の偽装をはいでいくという作業が必要である。本論文は、その問題の範囲を指摘したに過ぎないが、今後、そうした作業を通じてフランス、インド、日本を結ぶ近代宗教史の隠れた相貌が見えてくるはずであり、今回ほとんど触れることのなかった大川周明の政治思想についても、その類型と比較の中で改めて論じてみたい。

註

[1] 吉永進一「大拙とスウェーデンボルグ」『宗教哲学研究』第２２号（2005）所収。なお同「明治期日本の知識人と神智学」川村邦光編『憑依の近代とポリティクス』（2007、青弓社）所収も参照のこと。

[2] シュタイナーの三重組織論の影響に関しては衛藤吉則「大川周明の国家改造思想にみるシュタイナー思想とナショナリズムの関係Ⅰ・Ⅱ」『下関市立大学論集』49巻1号、2号（2005）が詳しい。また、大塚健洋『大川周明と近代日本』(1990、木鐸社）１８９－１９２頁参照のこと。

[3] カタカムナ農法とは、楢崎皐月が「超古代文献」なるものから解読したという疑似電磁気学的農法。比較的信頼にたる関係書には阿基米得『謎のカタカムナ文明』（1981、徳間書店）がある。大川の関与については細かいことは分かっていないが、大塚は次のように述べている。「大川は日本を瑞穂の国にするという理想を実現するために、植物波農法の普及に尽力した。植物波農法というのは、静電気発振装置を用いて植物の種子を優性化し、収穫を増大させようとするもので、種子を処理することによって米は三割、麦や粟は二倍、サトイモやジャガイモならば三倍の増収になるという。大川は昭和二八年一一月から、この機械をもって、山形、福島、宮城、山梨、群馬、岩手、長野、茨城、新潟、千葉各県下の農村を行脚した」大塚、前掲書、２７０、２７１頁。さらに晩年の手紙には「楢崎氏の件、傷心且遺憾至極に存候が、後禍を防ぐため止むなしと被存候。今にして一刀両断せざれば新瑞穂国建立の邪魔発生必定と被存候。・・・甲府に神器を擁する横内君が専ら之を医療に使用して農村を閑却し居るのみならず、色々不可解の行動あるを聞知したる故」（昭和２９年１１月１９日付池田徂弘宛書簡）大川周明関係文書刊行会編『大川周明関係文書』(1989、芙蓉書房）５９８頁とあり、創始者の楢崎と大川の間に対立内紛があったことをうかがわせる。

[4] 伝記的データについては、大塚、前掲書を参照した。また同『大川周明：ある復古主義者の思想』(1995、中央公論社)、松本健一『大川周明』(2004、岩波書店）も参照した。なお松本は竹内好の論を引いて大川の宗教性を低く評価しているが、それはむしろ竹内や松本の側の近代的な宗教観からの評価ではなかろうか。

[5] 明治36年10月12日の項、大川周明顕彰会編集『大川周明日記：明治36年～昭和24年』(1961、岩崎学術出版社）［以下、『日記』と略］２１頁。

[6] 大川周明『安楽の門』(1951、出雲書房）７９頁。

[7] 『日記』、１５頁。

[8] 『日記』、８０頁。

[9] 『日記』、７０頁。

[10] 『精神霊動』改版（1910、開発社）４５０頁。なお、この歌を用いて早くから「総合宗教論」を説いていたのは平井金三である（拙稿「平井金三、その生涯」科研報告書『平井金三における明治仏教の国際化に関する宗教史・文化史的研究』７－３０頁参照のこと)。松村介石もこの歌を用いている（松村介石『高嶺の月』(1977、道会）参照)。

[11] 『安楽の門』、２０４、２０５頁。

[12] 『安楽の門』、２０５頁。

[13] 深澤英隆『啓蒙と霊性』(2006, 岩波書店）第一章「新宗教と知識人」参照。

[14] 『岡田虎二郎先生語録』(1937, 静坐社)

[15] リシャール夫妻の伝記的事実については、以下の二著を参照した。Sujata Nahar, *Mother's Chronicle: Mirra, the Occultist* (Institut de Recherches Evolutives, 1989), Georges Van Vrekheim, *The Mother: The Story of Her Life* (HarperCollins, 2001)。ポール・リシャールについては、Michel Paul Richard, *Without Passport* (Peter Lang, 1987)がある。これはリシャール本人の部分的な自伝と著作 Scourge of Christ を、最後の妻の息子でニューヨーク州立大教授（社会学）の著者がまとめたもの。自伝は日本滞在までで終わっている。

[16] Michel Paul Richard, *op.cit.* pp.58, 59.

[17] Joscelyn Godwin, Chrsitian Chanel, John P. Deveney, *The Hermetic Brotherhood of Luxor* (Samuel weiser, 1995), pp.8-21.

[18] オーロビンドの伝記については Peter Heehs, *Sri Aurobindo, A Brief Biography* (Oxford University Press, 1989) を参照した。

[19] 『秋田雨雀日記』第一巻（1965、未来社）５８、５９頁。

[20] 雨雀は一つの脚本の題名をスウェーデンボルグにちなんで「天上の結婚」としている（『秋田雨雀日記』第１巻８０頁。１９１６年１１月２９日の項)。１９１７年１１月９日、１０日と鈴木大拙を訪ねて、スウェーデンボルグソサエティを紹介してもらっている（同、１１８頁)。さらに、鈴木大拙夫人ベアトリスの母親ハーンがバハイ教徒であったので、１９１８年３月３１日にはバハイ教の集まりでも大拙の家を訪れている（同、１３７頁)。

[21] 『秋田雨雀日記』では、一九一七年九月二六日の項にポール・リシャールの名前が出てくるのが最後である。

[22] リシャールとタゴールは日本で初めて出会っているが、それ以前よりお互いに名を聞き及んでいたという。リシャールの著書 *To the Nations* は、タゴールに記事を預けたことから、偶然にもタゴールの序文つきでアメリカで出版されている。Michel Paul Richard, *op.cit.* pp.84-85.

[23] カズンズは慶応大学の客員教授を勤めた詩人で神智学徒であった。１９２０年に鈴木大拙夫人ベアトリスらと共に神智学ロッジを結成している。Adele S. Algeo, "Beatrice Lane Suzuki and Theosophy in Japan" in *Theosophical History* vol.11 no.3 (July 2005)を参照のこと。

[24] Georges Van Vrekheim , *The Mother*, p.173.

[25] ポール・リシャール「大川周明全集に捧ぐ」『大川周明全集』［以下、『全集』と略記］第４巻（1962、大川周明全集刊行会）９６９頁。

[26] 『大川周明全集』第１巻（1961, 大川周明全集刊行会）８８４頁。

[27] 沼波瓊音（武雄）'は大川と東大の図書館で知り合う。沼波と、メーテルリンクなどの心霊文献の翻訳を行った栗原古城（元吉）は同じ新宗教に凝っていた。幸田露伴は大正５年４月17日の日記に「夜沼彼[ママ]武雄[ママ]栗原元吉来る。二人降神術の如き事を語る。所謂御筆さきによつて古今の事を知るといふ。（中略）論語の如きも御筆さき即神示によりて新解を得、これを新脩養社に寄せたりといふ。」と書き残している。『露伴全集』36巻

[28] 『全集』第１巻、８９６頁。

[29] 『全集』第１巻、９０２頁。

[30] 『全集』第１巻、９４４、９４５頁。

[31] 『全集』第１巻、９８７頁。

[32] 『全集』第１巻、９００頁。

[33] ポール・リシャル、大川周明訳『永遠の智慧』(1924、警醒社)、２１頁。

[34] 小林参三郎『生命の神秘』改版第２版（1934、静坐社)、２７、２８頁。

[35] 小林、前掲書、２９０、２９１頁。なお、『養生訣』には以下のように述べられている。「病の伝染べき理を説条

に、孝悌仁愛の志あるものは、其身内より発透て、上下四方を衛護ところの気ありて、いかなる悪毒気といえども、その人の雰囲裏を侵掠て、身を害することは決してなきよしを記せしは、この身体の中心より、上下四方へ発透て、雰囲となるところの光輝・・・をいうなり、これその人の心の善悪邪正徳不徳の等級に従て、発するところの気にもまた差別あり」(『日本衛生文庫』第三輯、１６１頁)

[36] Michel Paul Richard, *op.cit.*, pp.104-109.

[37] Robert N. Minor, *The Religious, the Spiritual, and the Secular : Auroville and secular India* (State University of New York Press, 1999) p.40.

[38] オーロビンドの以下の論文を参照。Sri Aurobindo, "The Synthesis of the Systems", in Peter Heehs ed., *Essential Writings of Sri Aurobindo* (Oxford University Press, 1998) pp.271-279. 同論文の初出 *Arya* 誌（1914)。

なお、synthetic という語は平井金三も用いたが元々は Hebert Spencer の synthetic philosophy に由来するものと思われる。

(2007. 11. 10 受付)

Okawa Shumei, Paul Richard and Mirra Richard—An Encounter

YOSHINAGA, Shin'ichi

ABSTRACT :

Okawa Shumei is known as a famous ultra-nationalist before W.W.II. But he started his career as a scholar of religious studies, especially as a pioneer of Islam study. Besides, he was also a seeker of religious truth and once belonged to an eclectic religious body called "Do-kai" founded by Matsumura Kaiseki. His religiosity can be classed among "religion of intellectuals" and he also had a connection with the intellectuals of the same kind. They were a French philosopher named Paul Richard and his wife, Mirra, who stayed in Japan and lived with Okawa for a year. Mirra had been a disciple of a mysterious occultist named Max Theon before coming to Japan, and after leaving Japan she would become a spiritual partner of a famous Indian guru, Sri Aurobindo. In this paper the spiritual and religious thoughts of Okawa and the Richards and Aurobindo are discussed to make clear the hidden relationship between them.

Key Words *: Okawa Shumei, Paul Richard, Mirra Richard, Sri Aurobindo, religion of the intellectuals*